

# 環境テーマに共同で川マップを作成

## 6校で4班の共同チームを編成

岡山市立津島小学校 三宅貴久子教諭（前・平福小学校）

### <プロジェクト以前>

私は当初ICTには、全く興味がありませんでした。岡山市立平福小学校が平成9年度に放送教育全国大会の会場校として公開授業をすることになり、「放送番組とインターネットの融合利用」を研究テーマに考えたのが、コンピュータを使い始めたきっかけです。前任の岡山市立鹿田小学校は道德の全国大会の会場校も務めるほどレベルの高い学校でしたが、研究主任として当初活気の感じられなかった平福小学校を鹿田小学校のようにしたい！と思っていました。

### 実践の経過、教訓

#### 前任校での実践がバネに

11年度にEスクエア・プロジェクトで「ネットワーク利用における環境学習の設計と展開～『ふるさとの川とともに生きるみんなの川守り隊世界への提言』の実践より～」を実践したのは、前任の鹿田小学校で環境をテーマに総合単元的な道德学習に取り組んでいた経緯があります。そのとき、もっと掘り下げてみたい、という心残りがあったのです。

交流相手校は、岡山県の旭川の上流域の美甘（みかも）小学校で、平福小学校とはキャンプなどオフラインでの長い交流がありました。

12年度の「同一河川流域校交流学習」は、11年度に同一河川プロジェクト（吉野川）の実践があり、場所を旭川（上、中、下流）に変えて実施したものです（囲み欄参照）。何か共同制作的なことではできないかと考え、デジタルマップを一緒に作りました。また、学校の枠を越えて子どもの興味・関心・問題意識に基づいた班編成にするといった形態で実施しました。さらに、学校によってスキルの差があったので、子どもたちが最後に「よかったな」と成就感をもてるように、教師間で話し合っ、参画する班については、実態と活動内容とを吟味しながら調整することもしました。

続いて実施した「球体パノラマ画像を活用した共同学習の設計と展開」は、河川流域から瀬戸内海へと範囲を広げ、大分県の小学校、山口県の中学校などに行った広域・異学年間の交流学習です。

その後13年度に実施したのが、「Webサーバを使った東京・南砂小学校との交流授業」で、私にとっても子どもたちにとっても非常に印象深いプロジェクトでした。最初は6年生の社会科「稲作の伝来」の授業から出発し、国語との関連も図りながら、最終的には「学級総合」に落とし込んでいきました。プロジェクトの間は、南砂小学校の伊藤先生（現・環境省）とは毎日のように授業作りや子どもの実態等について電子メールで打ち合わせをしました。成果は300ページの書籍「米米ワールド」（高陵社書店）にして出版しました。子どもたちに責任を持たせ、文章の推敲（国語）、出版社との連絡調整・本屋に書籍を置かせてもらう交渉・価格設定（社会）、表紙やキャラクターのデザイン（図工）など本気で取り組んでいました。この実践によって子どもたちは大きく伸びました。



#### 同一河川流域校交流学習

岡山県の旭川流域の6校（上流から順に湯原小、美甘小、誕生時小、神目小、清輝小、平福小）の子どもたちが、共同で「旭川デジタルマップ」の制作を約6か月間で行った取り組み。

異学年間での協働学習単元開発、子ども・教師のための「交流ガイドブック作成」、デジタル「情報カード」、環境会議の開催、電子掲示板による意見交換など様々な仕組みを用意。

マップ作成に当たっては、「プロデュース班」、「コンテンツ班」、「デザイン班」、「アピール・行動班」を学校の枠を越えて共同チームを編成した。

研究には、水越敏行・大阪大学名誉教授、堀田龍也・静岡大学情報学部助教授らも協力。

<http://www.kasen.niknak.ne.jp/kasen/>

## コミュニケーション力が育つ

ICT（テレビ会議）を活用することで、子どもたちにコミュニケーション力、特に方法論的なこと、技術的なことが身についたと思います。例えば、相手の目を見て、ゆっくり、声の大きさを考えて話す、結論を先に言う、構成して話をする、といったことです。

また、プロジェクトに参加した子どもたちには当時の印象が強烈に残っているようで、今もメールがくることがあります。また、様々なメディアを使う教師の姿を見て、子どもたちも使ってみたいと思う。例えばパワーポイントが分かりやすいと思った子どもは、自分のプレゼンに活用してみるといった感じでした。

こうした甲斐あって平福小学校は、今では文部科学省の奨励賞を受けるような学校になりました。



テレビ会議をする子どもたち（平福小）

### 10年間を振り返って

## 「子どもの自己実現の支援」がICT活用の原動力

私がICTを活用している第1の理由は、たくさんの可能性を秘めている子どもたちに、「その子なりに自己実現」してほしいと願っているからです。私の場合は、小学校5、6年時の担任の先生がひたむきで、あたたかみのある素晴らしい先生でした。そのような先生との出会いがあったからこそ、教師になりたいという思いが芽生え、現在に至っています。たくさんの人との関わりの中で、「なりたい自分」を探してくれたいと思います。

第2は仲間の存在です。今振り返ると、一人だったらだめになっていたかもしれないと思います。仲間がいたので、くじけそうになった時でも、次の一歩が踏み出せたのではないかと思います。

第3は結婚して鹿児島を離れる時、母親が得意の書道で、「苦悩なき人生に喜びはなし」と書いてくれました。私の人生全般の支えになっています。

### < 成功の秘訣 >

いくつか上げさせていただきます。

#### 教師間の連携

まずは「教師間の連携」につきます。各学校のカリキュラムの独自性を保ちつつ、しなやかに結ばれることが重要です。これは、相手校との連携もそうですが、平福小学校の場合は、校内でも教師集団が熱心で、ボトムアップ型であったのが功を奏したのだと思います。

#### 音信不通を避ける

音信不通は避け、連絡を密にすることが重要です。私はメールを毎日のように出します。用事のあるなしに関わらず、交流相手の教師に学級の子どもの様子などを伝えます。

#### 目的の明確化

「交流」は目的ではなく、手段です。目的を明確化しておくことが重要です。ところが頭では分かっているのに、つい交流自体が目的化することがあるので、注意が必要です。

#### 成果を出すこと

成果を出すと、子ども・親・地域が認めてくれます。メディアにでも出ると、保護者も「先生、がんばった」と評価してくれます。そうした支持があり、かつ行き過ぎがなければ、校長の反対といったこともなくなるのではないのでしょうか。

#### 研究主任の役割

研究主任は先生方の実態を踏まえ、研究のビジョンをえがき、実現への手続きを考えることも重要な役割です。研究主任が、教育センター・教育委員会の指導主事、全国の優秀な実践者と関係が深いと、人脈を使って様々なサポートや支援を得ることができます。

#### 教師が子どもに良いモデルを示す

子どもたちは、見ているようで見ていないものです。子どもたちに「視点を与えて指導する」ことが必要です。良いモデルを見せると、子どもたちは刺激を受け、「頑張ろう」という気になります。